

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	土屋 麻衣子
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>形成的フィードバックが英語学習における自己調整学習に与える作用 —英語苦手意識を持つ学習者に焦点を当てて—</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 深 澤 清 治</p> <p>審査委員 教 授 築 道 和 明</p> <p>審査委員 教 授 中 條 和 光</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文の目的は、英語に苦手意識を持つ学習者に形成的フィードバックを導入した授業という文脈を与えた場合、彼らの自己調整学習にどのような変化やプロセスが生じるかという質的現象を把握すること、およびその理解を量的研究により検証することである。</p> <p>第1章では、本論文の目的、用語の定義、論文構成を述べた。自己調整学習は学習者が学習プロセスに関して、メタ認知、動機づけ、行動の側面において能動的に関わる学習を指す。そしてそれは、自己調整学習の予見・遂行・自己省察の各段階において必要なプロセスを循環的に経験することで発展していくとされている。形成的フィードバックは、テスト結果や学期末の評価などの総括的フィードバックとは異なり、学習者の学習プロセスに関与し、彼らの考え方や行動を修正することを意図し、継続的に与えられるものを指す。従って、形成的フィードバックは学習者の自己調整学習スキルの発展に不可欠なものだと考えられている。本論文ではこのような理論的枠組みのもと、形成的フィードバックが英語に苦手意識を持つ学習者の自己調整学習に及ぼす作用を明らかにするものである。</p> <p>第2章では、本研究の目的に即して先行研究を概観し、研究課題を提示した。現在までの外国語学習研究では、自己調整学習理論をもとにした動機づけ方略研究に関して、自己調整学習の観点からの効果検証がなされておらず、形成的フィードバックの作用に関する研究数も少ない。従って、形成的フィードバックを提供した場合、(1) 学習者の自己調整学習はどのように変容するのか、(2) 自己調整学習尺度を用いたアンケート結果にどのような変化があるのか、(3) 取り組み課題に対するパフォーマンスにどのような変化が生じるのか、という3点を研究課題として挙げた。</p> <p>第3章では、英語に苦手意識を持つ学習者の取り組み課題に対して、形成的フィードバックを継続的に提供した場合の自己調整学習変容の現象を捉えるため、質的研究法、複線径路・等至性モデルを用いた調査・分析を行った。形成的フィードバックとして、主に(1) 目標、(2) 目標に対する現状、(3) 目標の達成方法の3側面に関して、学習者と対話しながら助言を与えた。その結果、調査開始時には受動的で、自己調整学習が起動していなかった状態が、形成的フィードバックを受けることで、効力感の増進と成果に繋がる自己調整学習を開始するように変化したプロセスが明らかになった。</p>			

第4章では、前章で得た質的理解を、第5章で量的に検証するために必要な英語学習版自己調整学習尺度の開発研究を実施した。探索的因子分析により自己調整学習を測る下位尺度として5因子が抽出された。検証的因子分析と予測的妥当性の検証を行い、開発した尺度には一定の信頼性と妥当性があることを確認した。

第5章では、形成的フィードバックの自己調整学習への作用を量的に検証した。自律的な継続が困難とされている授業外でのeラーニングを取り組み課題とし、その取り組み内容に形成的フィードバックを提供した。自己調整学習尺度を用いたアンケート結果、およびeラーニング実施数と調査終盤での語彙力テストの結果から、形成的フィードバックは参加者のメタ認知、動機づけ、行動の側面に確実なプラス変化をもたらしたことが明らかになった。また、半構造化面接によって、形成的フィードバックには参加者にやらされている感を与えず、自主的な取り組みを促す効果があることが見出された。

第6章では、本論文の総合的考察と結論を述べた。本論文での質的および量的研究を通して、形成的フィードバックには英語苦手意識を持つ学習者のほとんど機能していない自己調整学習を起動させ、促進させる作用があるという仮説が立てられ、それが実証された。形成的フィードバック提供の初期段階の役割は、主に学習者の自己調整学習のメタ認知の働きを代行しながら、彼らの自己調整学習を先導することであるが、学習者の自己調整学習の進展に伴い、その働きの主目的は自己効力感の助勢に変わっていくことが想定された。本論文ではその想定が4段階から構成される「英語苦手意識を持つ学習者の自己調整学習発達プロセスと形成的フィードバックの役割」としてモデル化された。

現在まで、多くの外国語学習における動機づけ研究が行われる中で、本論文の独創性は以下の3点にまとめられ、学術的および教育的意義を評価することができる。

- (1) 自己調整学習力の育成に不可欠とされる形成的フィードバックの作用について、それらの関係性および理論的説明に基づく実証的研究を行い、外国語学習における自己調整学習への効果を明らかにしたこと
- (2) 形成的フィードバックが英語苦手意識を持つ学習者の自己調整学習に与える作用に関する調査結果をもとに、形成的フィードバックと自己調整学習の発展の関連をモデル化することにより、当該学習者の自己調整学習の進展という現象に関して、今後の研究に対する枠組みを提示したこと
- (3) 英語に苦手意識を持つ学習者を調査対象とする研究を行うことで、これまで停滞していた彼らに対する動機づけ方略研究に方向性を呈したこと

外国語学習のように長期間に及ぶ学習活動において、自己調整学習力は成功の可否に影響を与える個人差要因の一つである。英語に苦手意識を持つ学習者が多数いるという日本の英語教育の現状、そして主体性の涵養を目指す大学教育方針の転換を勘案すると、自己調整学習力の育成という視点は不可欠なものとなる。本研究は、日本の英語教育において重要な教育的示唆となり得るとともに、今後、同様の研究を行う上で重要な視座を提供するものである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成31年2月6日